

## 神への賛歌：救済の歴史を物語る群れ

65 編は沈黙で始まるが、この詩編は力強い喜びの神賛美で始まり、祈りが聴かれ、神は慈しみを拒まれないという確信で終わっている。信仰者（イスラエルと教会）、いや「全地」は、ただこの神に栄光を帰し、賛美を歌い、この神の前にひれ伏すのみであると歌う。

### 1. 喜びの神賛美（1-4 節）

最初の言葉は「喜びの（大きな）叫びを上げよ」である。賛美の対象はもちろん神であり、「全地」への呼びかけであり、スケールの大きさを感じさせる。詩編 100 編参照。詩はさらにたたみかけるように、「歌い出せ」（「楽器に合わせて歌う」）、彼の名の栄誉を、また、「彼（へ）の賛美を栄光あるものにせよ」と命じている。神に向かって「言え」と声を挙げる。

その内容は「あなたのみ業（複数）のいかに恐るべきか。あなたの力のその偉大さを通して、あなたに敵対する者たちをあなたに屈服させるでしょう。」（4 節）とある。神は憐れみ深い神であるばかりか、その憐れみを貫徹する「力」の神である。（7 節も参照）「全地はあなたに向かってひれ伏し（遜って、礼拝する/あなたをほめ歌い、御名をほめ歌います）」と描写する。「セラ」（休止？）

### 2. 出エジプトの際の紅海渡渉の救済の思い出（5-7 節）

詩は 6 節から神によるヘブライ人の救済の歴史の回顧に移る。キリスト者にはイエス・キリスト物語の記憶である！「来て、そして、見よ」と呼びかける。神の御業を！ 前面に紅海、後面にエジプト・ファラオの戦車が迫り、万事休すのように感じた時、強い「東風」が吹いて（今でも時々吹くらしい）、葦の海（多分水深 2～3 メートル）が押されて、「大河」の中から渴いた地が現れ、ヘブライ人はこれを渡渉したが、これを追って砂地に入り込んだエジプト軍の戦車は車が砂に嵌り、元に戻ってきた海水で溺れてしまった！ この自然的・歴史的出来事がイスラエルの決定的救済の出来事になった。最古の「詩歌」と呼ばれるアロンの姉女預言者ミリアムの歌を参照せよ。出エジプト 15:21 b「主に向かって歌え。主は大いなる威光を現し、馬と乗り手を海に投げ出された。」6-7 節を声に出して読んでみよう！ 詩編 66:9 節「神は我らの魂に命を得させてくださる。我らの足がよろめくのを許されない。」神は死へと導く方ではなく「命」を与える神である

### 3. バビロン捕囚の苦難とそこからの解放（10-12 節）

この個所で具体的に何をイメージして作者がこれを書いているのかは不明である。この個所は荒野の 40 年を歌っているのかも知れない。しかし、ヘブライ語聖書の信仰の成立のもう一つの出来事はバビロン捕囚とそこからの帰還である。国の消滅と捕囚はまさに民族の存立の危機であった。10 節に「神よ、あなたは我らを試みられた。銀を火で練るように我らを試された。あなたは我らを網に追い込み、我らの腰に枷をはめ、人が駆り立てることを許された」と言われている通りである。

いったい、神がその民を「試みる」ことがあるのか？ テストすることはあるが、「誘惑」することはないであろう！ 二番目に登場する「練る」や「試された」の用語は不純物のある金属を精錬することである。ヤコブ 1:12-15 を参照のこと。エレミヤ 9:6 参照。英語の trial は「試練」、「災難」と同時に

「試す」という意味があるので文脈で翻訳を替えねばならず厄介であるが！「試練あるいは誘惑を耐え忍ぶ人は幸いです。…誘惑に遭うとき、だれも、『神に誘惑されている』と言ってはなりません。神は、悪の誘惑を受けるような方ではなく、また、御自分でも人を誘惑したりなさらないからです。むしろ、人はそれぞれ、自分自身の欲望に引かれて、唆されて、誘惑に陥るのです」。こうして、同じギリシヤ語が文脈によって「誘惑」そして「試練」と翻訳されているのです。私たちには「誘惑」と感じられることもあるのだが、神は決して「誘惑」することはないのであり、神はかえってそれを私たちの信仰を「精錬」するように用いてくださるのだらう。

イスラエルの民はその欲望に引かれて神から離れ、苦い経験をし、散らされ、バビロニアに捕囚となった。しかし、神はイスラエルを見捨てず、救済された。「我らは火の中、水の中を通ったが/あなたは彼らを導き出して/豊かな所に置かれた。」と言われる通りである。飢えや渴き、貧しさではなく、「豊かな所におかれた」。(12節)、豊かな充満へと導いた)「導き出す」とあるように、出エジプトの奇蹟的救済はバビロン捕囚からの解放として再び起こったのである。神は祈りを聴かれ、慈しみを拒まれない(20節)

#### 4. 救済史を物語する群れ(16-17節)

こうして、イスラエルの民は救済史を物語する群れとなる。「神を畏れる人は皆、聞くがよい。わたしに成し遂げて下さったことを物語ろう。「宣言する」とも翻訳可能。神に向かってわたしの口は声をあげ/わたしは舌をもってあがめます」(16-17節)

#### 5. 捧げものと自省(13-18節)

13節からは詩は、「我ら」から「わたし」に変わって個人的経験を歌う。以上のような神の救済の業、祈りを聴いて下さることに応答して信仰者のなすべきことは「感謝」であり、「満願の献げものを携えて神殿に入り、肥えた獣、雄羊、雄山羊、雄牛を捧げることである！ 焼き肉の良い香り！

そして、心に悪事がないかどうか内省すること(18節)である。